

POETIX（ぱえていつくす）序説 新しい人磨へ

はしがき

白石火乃絵

序説では、具体的にすでに書かれた詩を引用して論じたりはあまりしません。便利道具とその由来をおもに示していく。生成AIとはちがう不思議道具を提供してみたい。実際、ChatGTPには魔術力があるようで、というかひとはどうにも新しいテクノロジーに魔術をみいださずにおけない性があるらしい。そのオリジナルギヤングスタが文字という道具だ。文字はまず法として、宗教や国家の規範力となつた。が、同時に、文字は詩というアベルをも生み出す。盲目のホメロスは、口承詩をうんだ。が、文字の詩ができてからあとで詩と呼んだので、それまでは口承文学、いやこの文学にも文がある。つまり名前のない何かだつたと考えたい。とにかく詩は、どうやつても文字で書かれる声なのだ。文字という毒の血清と書いたこともある。わすれがちだが生成AIも文字だ。しゃべるやつも、いかに口語体であろうと文字を読み上げている。文字がなければ、これをめちゃくちゃあつめてアルゴリズム活用してうんぬんかんぬん出来ない。そして、生成AIが来る法と化す循環は、文字に化かされてきた有史人類のいち反復を演じても不思議でない。わたしはそこに魔術をみいだす蒙昧な人間の側にむしろ興味がある。詩はこのじつさいはただの自動機械にすぎぬ無機物に、人格や神性やもししかしたらエロスさえも見出す奇妙な心がつかまえる。知恵はどんなにインターネットの情報を集積し「学習」したとしてもそこにはない。ただわたしたちの原生生物それ以前、ただの原子だった頃からの記憶をもつこのからだにある。

このからだの知恵は、心という無知蒙昧な可愛いやつをとおすことでしか得られない。が、この心というやつが面白いやつで、知恵をたずねず、あることないこと妄想によつて無知を埋めようとする。陰謀論もカルトもみんなこいつが作り上げる。致命的にあたまが悪いので（ほんとうはそこがいいところのだが）ChatGTPにウイズダムを求めもする。これを水色野良猫型ロボットに入れれば、明日とはいわず、話し相手としてだけだがドラえもんは抽斗から出てくる。ポールのうたうレットイットビーのウイズダムのように、擬似母性としてのソフィアちゃん。それがこの機械だ。詩人は、その太母たる文字を相手に何千年もジャイアンへの仕返しを相談し、やつぱりさいごは痛い目をみてきた。詩をかく、一文でもいい。するとそいつがしゃべりだす。この対話と、ChatGTPとの会話は、かなり似ている。調教だつてしますぎるくらいしてきた。機械との会話にはまつたら、詩はすぐそこだ。詩は、この世のすべてだ。だから詩の理論は、この世のすべての理論だ。POETIXにはこの世のすべてを解き明かしたい野望がある。だれもまだ、詩によつて解き明かされた世をみたことがない。みたら、あと三万年くらいはひとつとは詩の中毒になり、やがて文字を捨て、詩でもつて会話するようになればいい。この面白さを越えるテクノロジーはまた詩によつてつくられる。詩をすべての中心に発達する科学技術はどんなだろう。S F 小説とは順番がちがう。テクノロジーの発達や荒廃は夢をみさすが詩は夢みる。ボードレールはいう「この世がいい世であるかは、詩人を基準にみればいい。彼らが幸福ならいい世だ」わたしはもうめちゃくちや不幸でしかたない。幸福になれなくとも、幸福になれる世を想像してみたい。想像するためには、現実に根をおろしたたしかな根拠がいる。ほこりをかぶった原理論というやつだ。まだ動く。こいつで新しいトランジスタラジオをつくろう。

音楽には理論がある。音楽家になりたかつたわたしには、本能だけで曲をつくることも、理論の上で曲を書くこともできなかつた。エレキギターの申し子ジミ・ヘンドリックスは樂譜がよめなかつたというが、たとえ「言語化」できなくとも、言葉にできない彼の経験に理論がなかつたということはまず考えられない。WALKMANにもし1アーティストしか入れれないとなつたら、彼がその演奏をきくために皿洗いのアルバイトをしていたというアート・ティタムと悩み抜いた上でわたしの撰ぶチャーリー・パークーは、理論開拓者だ。この不幸な兄貴から勝手に学び取つたアティテュードを生涯貫いたマイルス・ディヴィスも、彼がみつけたときは芋い田舎のサックス吹きにすぎなかつたジョン・コルトレーンももちろん大理論家だつた。最高の音楽家モーツアルトだつて理論は朝飯前だろう。みんな大好き（ぼくは嫌い）ビートルズ、かれらはちつとも理論を知らなかつた。たぶん不名誉とひきかえに音楽からの寵愛をひとりじめしているカニエ・ウェストも理論はさっぱりだとおもう。彼らにはいわば生得の理論がありそれを奏でることはできても言葉にすることはできないので、かわりに彼らから理論をひきだそうとするオンチどものひこええすることとなる。令和の京極殿・米津玄師はたぶん理論の変態だ。理論に通じているかどうかは、良いアーティストの条件に関わりない。だが、理論（言葉にできる）なければこの世のいい音楽は少なくとも減りはする。ビートルズがきげてもバードのきけない世はさぶい。理論は無力なのがいい。わからなくとも何の支障もなく、わかつたところでそれでどうということはない。実践も意味がない。けつきよく本能に任せて書くだけだ。わたし自身そうだ。だが、ほんのたまに、求めてもなかつたとき、八咫鳥のごとく導くかもしれない。八咫鳥も無力だ。ただこいつ自身が無力なゆえに、その奥にふしぎな逆光線をおつてくる。

|の
占
バ

想
ひしーす

万
の
葦

歌意
(リック)

一
一
祭
①

聲
めーろーす



律
りすもーす

韻律
(ノロウ)

文法
(シーン)
構成
(ハース)

〈本居宣長／菅谷規矩雄〉

〈ヴィトゲンシュタイン／吉本隆明〉

喻
めたふら

音韻
(ライム)

占
バ
万
の
葦

詩想軸
(金子みすこ)
(あ・空)

八百比丘尼
乖離症

あ
葦
の

思考
Denken

(肺／喉)

暗喩軸
(左川ちか)
(え・水)



肉体
(イ・風)

統合失調症

実感軸
(永瀬清子)
(お・土)

神経症

直観
Empfinden

(腎／鼻)



感覚
Intuition

(胃／舌)

〈中村文昭／空海〉

〈ユング／三木成夫〉

感情軸
(林英美子)
(う・火)

躁鬱症

感情
Fühlen

(腸／腹)

感情
(林英美子)

躁鬱症

バ
葦
あ

北

冬

西



東

あ
万
の

夏

春



南

秋



〈宮沢賢治〉

春

D Digital-Analogue あ あにましおん バ バーチャルの果て
占 詩占い 葦 考える葦笛 万 万葉集試訛 L Let's go Crazy!

まず、右下の「祭」の○から見る。……の／＼も入つてゐる。

読者にはぜひ書き込みを

ダイヤル てんてん パックトラッシュ

お願いしたい。冬から春に→。春から夏へ。夏から秋。秋から冬。砂時計みたいな♂の字が浮かび上がる。季節といいそだが、まず節というのは、大陸からきた（指の節デジタル）で、ここには適さない。季というのも中国語で兄弟姉妹四番目の末っ子から転じて物事の終末をさす。ここには早くても遅くても何度も何度でも始まる始まりしかない。それが「祭」。この「祭」を中心に春夏秋冬がある。まず冬から春になるのに祭がある。ここでさつきの季節といつしょにきみにはもう一肌脱いでいただきたい。油も塩も塗れとはいわない。が、あたまのネジは2本くらい抜いたうえできるかぎりぴつたりくついてきてください。冬に春きたり、春は冬（夏）きたり、冬（夏）に春（秋）きたり、春（秋）は冬きたり。これが少し前のひとびとの祭の考え方です。一年は、今までいう春夏＼秋冬で、繰り返しの二回ということになる。冬と冬（夏）とに大切な祭をする。その祭をふゆまつりといい、これがやがていまの季節としての冬の義に移転される。冬と冬（夏）の季（春と秋のはじめ）にやるのでふゆから冬にうつってゆく。夏のふゆまつりの名残がいまのたなばたやお盆などです。ただ新暦七月七日にやる七夕は夏の季でないですし、家庭祭祀のお盆も廃れつつある令和には八月十五日の終戦記念がとつて代わるかもしれません。この日を鎮魂祭（フユマツリ）と思うついで「鎮魂」のよみ方（意味）、行為じたいのうつりかわりに耳を傾けておきたい。生き急ぐ読者のため、この話がなぜ詩の理論になるか、簡単にいつておけば、さつきの♂の字をたとえば「文法」の○に同じ向きで書き込んでいただきたい。歌意から文法をへて音韻へ→。音韻から韻律へ。韻律から文法をへて構成へ。構成から歌意へ。歌意はふたたび文法を通り音韻へ。これが出来上がるまでの鎮魂過程で

もあるが、出来上がつてからもこの循環をくりかえし「文法」の力を汲み自立してある。「祭」と同じくここでも根源としての「文法」(^{〔生産法でない〕})を意味する。ここに気づいたのがわたしの見立てではヴィトゲンシュタインで、背中合わせに言語の美としての自立の理論を追求したのが吉本隆明だ。ほかの○でもだいたい思索者／詩作者、また両性具有者から学ぶ。ラップ（バトル、フリースタイル含む）ももちろん言語表現なのでこの「文法」に基づく。もつといえば舞踏も、演奏いわば音楽の比喩で語れる全藝術表現（絵も）にあてはまる。言葉を遣わない「非言語藝術」も、いや、人間の全表現が根源の「文法」従言語藝術だ。

「祭」(てんてん)は詩の女神への捧げ物としての奉り。(まつ原義でない)「祭」中の演奏の奏に続きに藝術の根に近い。
（……の○3つと「心」の○は少し違う見方が要る。翻つて「祭」の見方もまた深まる）

「時期で言ふと、もに籠る時が冬である」（「原始信仰」）もに籠る、とは「我々には、もにこもる」といふと、親とか親類とかの間で誰か死んで、喪にかゝつて居る間ぢつとして居るやうに思へますけれども、実は物の中に入つて外に出られないといふことなのです。何の為にさうするかといふと、我々は謹慎して居るのだとしか思へませんが、謹慎は勿論謹慎ですが、穢れてゐるから謹慎して居るのではなく、身体が空っぽになつてゐる為に、身体の中に物の入るのを待つて居るのです」（「上代葬儀の精神」）。中学三年の冬わたし^物が初めてうつ病になつたとき、母は随分憔悴したようだ。何とか起こそうとするのだが、布団から動かない。しまいには自身が骸骨のように痩せてしまった。うつ病は、折口のいう「身体が空っぽになつてゐる」健康な状態であつて、活動力^物の入るのをちつと待ちじつはやがて外に出るために欠かせない重要な期間なのです。だからほんとうは慌てることなどなかつたのだ。うつ病者とその身近な人のためにもわたしたちの根本である魂の生活について、現代精神医学と

いわす来し方から学べることこそ甚大なのです「だから、其物が入ると直ぐに『も』から出て来ることになるのです。此は年中行事の中にあることで、『冬籠り』といふことがそれであります。春の枕詞になつて居りますが、実は、冬ぢつと外へ出ないで籠つて居ることを、冬籠りと言ふ様になつてゐますが、実は、植物の上でなくて人間の生活にあつたのを、植物に移して言つて來たのです」（同前。）こんど“物”というのが“外来魂”という言い方になり、もに籠ることがものいみとなる。さつきからもというのは何かよくわからないが籠るための未詳の道具（折口は布団ようの何かを考えている）と留めておく「かうして、完全にものいみが遂げられた時に、外来魂は來触して、内在魂となる。古語ふるは、此作用をあらはした言葉である」（「原始信仰」）折口はこのふるがふゆのものとの語という「即、ふるは、單なる接触の意義を持つたゞけでなく、衝突・附着の古義を持つて居た。さうして、此儀礼を、たまふりと言うた。第一義の鎮魂である。鎮魂を、惡靈を押へる為の行事と考へるやうになつたのは、後代に於ける意義の変化である。ふるなる語も、發音が変化して、これがふゆになると共に、意義にも分化を起して、増殖の意味を持つやうになつた。來触・附着から転化して、内在魂の分割と言つた内容を持つ様になつたのである」（同前。）ふるからいまの殖^ふえるの古語でもあるふゆがなつたといふ。殖やすにもなつてくる「それから、尊者の分靈を受けて、その威力にあやかる信仰が発した。又、尊者の分靈をうけるといふ事は、一面に於て、恩寵を蒙る事になると信じたので、それから、みたまのふゆなる古い用語例が生じ、それを分け与へられる祭りをみたまのふゆまつりと言ひ、その祭りの行はれる時期を以てふゆと称した事から、後には、ふゆなる語が、冬期を意味する冬に固定して、季節をあらはす言葉となつた」（同前）ゴシック体にしたところも大事で、ここ

は六つの○中の「文法」を踏まえて述べている。「民間語源説」という言葉があるよう、この語源の説（とくに地理関係）というのは九割九分信頼がおけない。ここでPOETIXには、チエック機能もある。「文法」の○に「祭」と同じ向きでさつきの↓で♀の字を書き込む。すると上の「歌意」（たとえばふゆ二文字でも広義の歌とかんがえる。歌の意味すること）と下の「音韻」（ライム）のあいだには「文法」がある。「音韻」から「韻律」、「構成」から「歌意」は「文法」の関を通じない。また、「韻律」と「歌意」、「構成」と「音韻」のあいだには↓がない。ここで「祭」の○の……の下を書き込んでみる。谷折すると「韻律」（春）と「構成」（秋）と、「韻律」（夏）と「歌意」（冬）と重なる。「文春」と醜聞みたく。「文法」とはここではふゆの遣われ方だ。ふるからふゆへ音がうつることでその遣われ方が変わり、文脈のなかで「構成」される意味が変化していく。また、ふるからふゆに音がうつつても折口信夫はふたつの語の遣われ方（「文法」）を古典文献をあらつたうえで説をうつてゐる。素人としてはふゆは植えると短絡したくなるがそうするとふゆの手前にふるのあることに気づけない。「文法」は遣われ方であるが、根本は遣い手とそのりういんのもつ感性の思想にある。「歌意」「音韻」「韻律」「構成」これらのどこに違和感があつても反省に出会うし、なによりも「文法」からまず想わねば、シーンに対するRESPECTなき絡繰屋、戻売りにおつ。ヴィトゲンシュタインなら、その「言語ゲーム」に加わるというだろうか。これは祭に参加するのと同じく命懸けだ。言葉や歌をわかろうとするというのはそういうことだ。こうであつてほしいという手前勝手な願望を、相手に押し付けることとわかろうとすることとは無縁だ。そうであつてほしいという願望を抱いたとき（たとえば神や幽霊がいてほしい）すぐそれがそうであることになる（神はいる。幽霊はいる）短絡癖が、川向うの信じると

いうことと同じにいわれる。「陰謀論」では事実そうとわかれば安心だからそのおのが心が根拠だということになつて未詳の事実までそうということになる。これは信でなく不安といふべきだ。神社巡りや歴史考察に熱心なひとびとは、けつして信心深いのではなく不安がそうさせている。キルケゴールは「教会は異教徒をさし罪深い人々というが、これは教会が自らを失くし、相手に自らを与えていたのと同じだ」という「なぜなら、キリスト教の核は罪であつて、正しくはその罪をもたない人々のことを異教徒と呼ぶのだから。彼らはただぼんやりと罪の予感の手前、不安のうちにあるとというべきだ」（『不安の概念』から記憶で大訳）そして大事なのは、この不安こそが、精神到来の前触れにして絶対の条件なのだという。さきの折口信夫のいうものいみして待つ“物”や“外来魂”と、このキルケゴールの“精神”とは、庶物崇拜と一神教の懸隔よりはぜんぜん別でない。たまたまある精神が活動して、そこから堕落、世俗権力とむすばるかたちで諸々のキリスト教会がなつたので、イエスもまたものいみする一個の強大な不安あるいは深大なうつ病者にはかならなかつた「はるもその如く、かうして外来魂が附着して、ものいみの状態を脱することをはる」と言つたのだが、これが、はるまつりという過程を経て、後には春期を意味する春となつた。とにかく、年の暮から初春へかけて、魂に関する種々の行事があるのは、此信仰から発して居るのである」（同前）ふゆもはるもいまのわたしたちの耳には「自動詞」のように聞こえるが体言（「名詞」）も用言（「動詞」「形容詞」etc.）も未分化だつたときの「文法」を想わなければその空はずつと暗いまだ「冬籠りして其上ではる」の状態が来るのです。はるといふことは、普通、発するといふ意味らしいですから、つまり、露出するといふ意味になります。これに一番適切なのは沖縄のはれのあそびといふ語があります。あそびといふことは、沖縄では、

日本の古い語と同じく、神事の踊りです。はれのあそびといふことは、素裸になつて春ノ口といふ巫女たちが踊ることです。其をはれのあそびともうちはれのあそびとも言ひます。で、此はれといふ語は着物にも晴着など、言ひますが、そのはれぎといふ言葉もその系統から説明して行けるのです。ともかく、沖縄などへ参りましても、或は日本語の古語の使ひ方を見ましても、はるといふことは、外に出て行くといふ語です。で、冬籠りといふことが春の枕詞になつて来るのでです。さうするところに、暫く寝て居たものが、起きてきたと同じやうな状態になる訣です」（上代葬儀の精神）「民間語源説」だと、春は芽が張つて地面から顔を出すや、たんに晴れるということになる。どちらも外に出て行くことではあるが、ちがうのははるがじぶんのからだの外に出て行つてしまつて外から観察されていることだ。服着たまま「文法」の外につつ立つてゐる。もういちど引用すれば「かうして、完全にものいみが遂げられた時に、外来魂は來触して、内在魂となる。古語ふるは、此作用をあらはした言葉である」あえてふゆへと分化させずふるのまま「ふる・まつり」ということを考えてみますと、わたしが詩の理論においてます「祭」から始める訣がみえしていくかもしません。先回りすれば「内在魂」にふる「外在魂」や「物」とは「言葉」です。「今までのところでは、まつりの語原が、あまり説き散らされて、よしあしの見さかいもつきかねるほどになつてゐる。その中では『祭りは、献りだ。政は献り事だ』と強調して唱えられた、先師三矢重松博士の考えが、ます、今までの最上位にあるものである。まつるという語が正確にわからないのは、古代人の考え方のみこめないからだと思う。神の代理人者、すなわち、御言实行者の信仰が、まず知られねばならぬ」このみことというのがわたしがさつき仰々しい二重尖括弧をつけておいた言葉というのと同じです「みこと

とは神の発した呪詞または命令である。みことを唱えて、実効を挙げるのがもつである。『伝達する』よりは重い。神に近い性格を得てふるうことになる。み言の内容を具体化して来るという意義が、まつるの古い用語例であつたらしい。それは、またす・まつるの対立を見れば知れる。語根まつをるとすとで変化させている。使・遣という字が、日本紀の古訓には、またすと始終訓まれていて。まつりだす・まつだすなどとは、成立を別に考えねばならぬ語であつた。意訳すれば、命を完了せしめるというようにも説けよう。み言を具体化してやる。こういつた意義が、まつを中心にして、通じていて。その実現した状態を言う語が、また（全）しなのである（『古代研究』）不安をひとはものいみせずにする解消しようとする。全けむところまでいって言葉をわがものにしようとしている。だから「言葉は嘘をつく」「言葉じやない、大事なのは」ということになる。だが言葉は祭において必ず実現する（冬籠りものいみまたしふゆ詩はる）心淨き者に 常に 春祭ありわたしの十代祭体験をそこにいたかのよう描いたのはまだ折口信夫しかみない「来訪神のあつた時、此神の威力を表現し、其によつて、邑落全体の生活が力強い威力に感染することが出来るようにするのは、そうした訓練や、表現が十分に保たれていなければならぬはずだ。来訪神をとり囲んで、眷属の形を以て、荒スサまい行動を振るわねばならぬ。/そういう意味において、彼土における生活を表現するのは、この世の人間の表現力に俟つ外はない。（：）彼等の尊者が来迎する時、他界の事情はここに写し出され、この世と他界とを一つ現象として動いているものと実感するまでにせなればならなかつた。（：）歎びに裂けそうな来訪人を迎える期待も、獰猛な獣に接する驚きに似ていた。樂土は同時に地獄であり、淨罪所は、とりも直さず煉獄そのものであつた」（「民族史観における他界觀念」）

予告 夏と秋については②で書く。秋の語源は断然おぼつかず、夏のは「民間語源説」を出ない。「飽く」秋、「生る」夏というのは〈祭〉からみえてこないからだめだ、というより、語の音韻にたいし漢字をあてて意味をとく式の解釈それじたい意味分化を示している。ふゆ、はるが本稿でそうだつたように、なつ、あきと表音がなのまま述語文で意味が語れなければ語源説はなりたたない。漢字が舶来してからどんなに長くとも二千年は出ない。ニホン語は声の時代を三万から六万年の範囲でもつていてる。やま、かわなどにしてもすいぶん古い。とかく本稿で読者にこれだけは了解せられたいのは、はる、ふゆは「季節」の名称でないということだ。季節とは外部の自然のうつりゆきのことではない。魂の状態や変化をいう「名詞」「動詞」「形容詞」などへ未分化の肉体表現だ。夏と秋とは語源説より具体的な祭祀を追つていったほうがよさそうだ。折口信夫も秋にかんしてはおそらくといったところまで、夏は語源についてはおしだまつていてる。わたしの好みでは「なづむ」の語根「なづ」が気になるが、纏つた事例がみつかないのでまず採れない。なつもあきも漢字到来以前のニホン語であることは、もしそうでないなら「夏」^カ「秋」^{シユウ}というしかないのだとたしかだ（中国語に「なつ」「あき」などといふ音はない）夏にかんしては「みそぎ」を元を取り上げ、そのポエジーの源泉力をたずねたい。あまたらすとはなにか（夏）すきのをとはなにか（秋）がニホン語においては比較的大事になる。前者について結論からさきにいっておけば、たなばたひめだ。水の巫女。左中〈肉体〉の……の左「暗喩軸」と深くかかわる生活。ニホン語美の最右翼。POETIXはニホン語のアンダーグラウンドへ冥界降りして、全世界の詩の原郷をめざす。

この「序説」は、だいたい一年ほど、連載十二回（各①②二回ずつ）で仕上げたい。①②と二桁表記にしてあるのは「序説」のあとの本論？でも引き継いでいきたいからだ。POETIXは詩学、すなわち学問としての面も持ち合わせてるので読者にはぜひ大いに（まったく豪奢な願いであるが）質問していただきたい。学問とは質問のことだ。自問自答を基本としてわたしは書いていくが、連載である以上、読者からのリアルタイムの質問に応えていくことで予想しないダイナミックな展開があるかもしね。henkou65@gmailか「偏向」Xの

DMでお待ちしている（質問内容は連載本文に引用させていただくことあらかじめご了承ください）白熱する学問をともにつくつていけたらどんなにいいだろう。孤独は学問・藝術の源泉にして絶対条件だとしても孤立は必要善でない。学問が大学にしかないというの顔のない権力のおもうつばだ。ここから一年は序説にかかりつきりになつていいと思つています。質問・批判にはわたしは全力で応答しようとするでしょう。打てば鳴る、とはかつてに自負しているが、いい打者にめぐりあうのがむずかしい。すでに何を言うかでなくどう言えるか、今回はおもしろくなつた、いけなかつた、フリースタイルの次元で表現をとおしてしか考えられない全領域がPOETIXの学問対象だ。まず学が立たねば詩論などどんなにあけくれようと同業者間のおしゃべり（こいつが藝術をおわらせる）をでない。〈祭〉なき春夏秋冬のごとくさぶい。そして質問の来ることはないことはよくよく承知しているつもりだ。令和にあつては人に質問するということは自分はおまえより頭がわるいといつているのと同じことになると思われているようだ。けれど欲求としてはあるので、口のかたいChatGTPなどにはすいぶんいいにくうことまできいている。人に質問しても「ググれカス」などといわれのだから無理もない。
〔山本哲氏談^on Youtub^e 山本哲士 吉本隆明 心的現象論 目の知覚論 アップロード日付2020/6/3〕
認知症研究の大井玄氏によれば、わたしたちがおののおのの全体感として（無意識含む）感知している〈世界〉のうち視覚でとらえているのはその十万分の一ほどにすぎないという。人里離れた土地など旅すればすぐわかるが、インターネットで得られる情報はもうほとんど役に立たない。未知へは全くひらけてない。入口まではみちびかれても、そこからは生身と出会いとによつて蒐めるしかない。そこからさきが本題なのだが、非常に興味深いことにわたしの年下の知人の幾人かをみていると、ネットの情報をなぞり、端緒までついたところで満足がいくようだ。人類の叡智（情報化できないのだが）のうちインターネットから得られるのはたぶん一兆分の一にもみたない。なによります自らの体験、これからのもそうだが、そんなのより幼少の頃のこと、ほんとうによく忘れている、そいつを思い出すだけでいつたいどれほど恵みが得れるか。質問はまずここで。ぱりあへと育てよう。ものを知るにはまずわかっているとおもつてていることから未知へとかえしわたしたち自身の無知を知るのが初まりだ。

追書 「鳳尻紀」12月号（一年前の）に「鳳尻紀執筆予告」を書いた。そこでPAGE41の下に示した七つの原稿の予告を行つてある。これらをこの「序説」の六つの○に重ねあわせると大体どこにあたるかを同頁に書き込んでおいた。下線を引いた「Digital-AnalLog(ue)」〔(ANIMA)TION〕「バーチャルの果て」が「偏向」を始めた当初からわたしが書くといつてきた原理論の三部立てだ。さつき気がついたが、六つの○をみていくとこの三部がリレー形式となつていて、略号で示せば〈文法〉はD|〈心〉はD|からあ〈祭〉はあ|〈ここ〉/〈そこ〉はあからバ|〈肉体〉はバ|〈むすび〉でバからDにバトンタッチして一周する。こういう風には示せるのだが、言葉や文章で説明せよといわれたとたん途方にくれてしまう。これまで何度もチャレンジしてはいる（バツクナンバー参照）今回この「序説」でようやく総合ができるそうだ。一周することに各○の理会も謎も深まっていくので、周われるだけ周わってみたい。いつか六つの○もいらなくなるところまで。はしがきに“POETIXにはこの世のすべてを解き明かしたい野望がある”と書いたが、たとえば経済学は〈心〉の○から延びていく線上にあり〈肉体〉のポエジーをくむ。ユングは夢における〈お金〉の表象を心的エネルギーの量的表現という。また記号化以前の金本位制、もつと昔の殷王朝跡でみつかったインドや東南アジア原産の宝貝（琉球でも産出していた）へ遡行すればたんなる希少価値でなく、それに何か不思議を感じた昔のひとのポエジーのありかたに経済学のフルサトをみるとができる。太古のたまといえば、わたしたちは勾玉など想定しがちだが、貝殻や石ころなどもたまといった。のみならず弓や串も琴も筐も、そこに魂の籠もると感じられた物は皆たま：と呼んだ。人間の約束事といおうと、わたしはただの紙切れやスマホのタッチ一つで、桃や辞書が貰えるのがいまだに不思議でならない。不順な手続きで（見習いを経ず）魔法使いになつたようなうしろめたさもある。さいきん心暗くなつたのは、わたしが聴いて育つてきたパンクロック（ここではニホン語に限る）でもが「お金で買えない価値」などといつてきた、漫画でも「他人がつけた値段より、てめえの価値」と。

価値観というのも非常に便利なことばだ。言葉尻にとらわれず、いわんとすることはわかる。値段とは完全に相対的だが、価値となると美的判断が入ってくる。が、価値はどこまでいつてもみんなにとつていうニュアンスがまとわりついてくる「聴く（観る）価値ないよ」とか「絶対的な価値がある」とか。価値がそもそも絶対なら文法からそうはいわないだろう。いつでも価値（値打ち）とはよし、あしだろう。それよりか同じ経済用語をつかつていても「からだが資本」という慣用句のほうが価値はないが含蓄はあるようきこえる。前世紀に新型コロナ・ウイルスよりも広まつた「資本」などいう有名無実の語が、ここでは正しい用法をしめしている。だから「からだが資本」の“資本”が「資本」という語の資本だ。パンクロッカーや漫画家は「お金で買えない資本」「他人がつけた値段より、てめえ（たち）の資本」といえばよかつたのだ。商品はお金で買えるが、資本は買えない。また他人がどういおうと資本はすでにそこに働いている。なんといおうといまここにわたしのからだが生きているように。そしてからだはたえず栄養を要求しながら敢然として自らの死を育てつつある。心はからだの死にたいする超越の態度にどこかComplexをもつ。また私（自我）という意識はまったく応対がとれず、なるべくそつちのほうを見ないようにして。ニホンの和歌が心に価値をもつてゐるのにたいし、詩がわが國でここまで不興を買って来たのは、詩はまさにこのからだが資本だからだ。「もののあはれ」という平凡な語におのが思想の全重量をぎつぎつにつめこもうとした本居宣長は、ほんとうなら『もののあはれ』を知るには和歌の発想からではだめだ」とまでいうべきだつた。だが王朝和歌や俳諧にたいする価値観はけつして理屈でうごかせるものでなく、漢詩などもつてのほか、王朝文化復古の系譜のさいごだつたはずの芭蕉とも、古典ロック・ファンとボカロ・ファンとのごとく互いに素。短歌に俳句に口語自由詩が加わって、ニホンの詩歌句約百三十年、みごとにからみあわない三つ巴の対義語のような状況が続いてる。まるで令和のわたしたちのアタマと心とからだのばらばらのことく？ だつたら元手は一つ。三つ巴。六つ〇。

POETIX (ぼえていつくす)

序説

新しい人磨へ

白石火乃絵



構成
(バース)

音韻
(ライム)

〈ヴィトゲンシュタイン／吉本隆明〉

韻律
(フロウ)

音韻
(ライム)



聲
(のろいす)

むすび
〔縛〕

律
(りそひす)

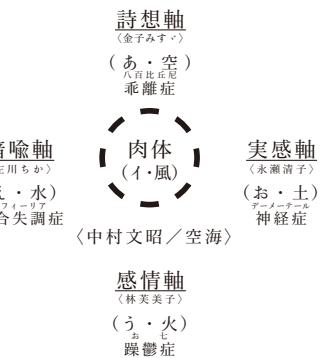
〈本居宣長／菅谷規矩雄〉

喻
(めたふおり)



文法
(シーン)

音韻
(ライム)



詩想軸
(詩思みすく)

(あ・空)
(八百比丘尼)
乖離症

暗喩軸
(左川ちか)

(え・水)
(オフィーリア)

統合失調症

〈中村文昭／空海〉

感情軸
(林美美子)

(う・火)
(お・火)
躁鬱症



思考
Denken

(肺／喉)



直観
Empfinden

(腎／鼻)

〈ユング／三木成夫〉

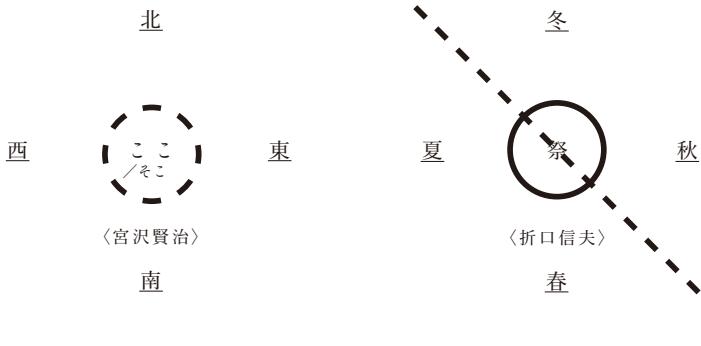
感情
Fühlen

(腸／腹)



感覚
Intuition

(胃／舌)



西

東

冬

夏

秋

〈折口信夫〉

春

〈宮沢賢治〉

南

Cancin' up! 春 夏 秋 冬

共に行ひつ 風の後を

「」〈祭〉 ⑩【序説における〈祭〉完結篇につき】^⑪（前提）の三倍ちかい厚みとなっております】
秋とはなにか「Die Welt ist alles, was der Fall ist」からの有名な（そして無実ともいえる）
ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』ドイツ語原書の第1文です。同じ一九二一年の
独英対訳版の英訳では「The world is everything that is the case」これならわが国の義務教育
レベルでも直訳はできるだらうと思いまや、この世界はケースであるところの全てだ、と。
caseはもつう論理学の翻訳語で「事態」と訳されています。わたしたちの日常語で「事態」
といえば、つい最近ではCOVID-19の「緊急事態宣言」でしょうか。イギリス語の著名作で
『The Case-Book of Sherlock Holmes（シャーロック・ホームズの事件簿）』の「事件」というのは
いかが。どうやらcase（事例、事態、事件、訴訟、症例、実情etc.）には、対岸の火事でな
くわが身が（言葉の上で想い浮かべているにすぎない時でも）その禍中にある事といつた
ニュアンスがあるらしい。わたしの十代のバイブルだった湘南や横浜の暴走族をモデルに
した漫画のせりふでよく「そいつアコトだぜ」などとあって、あたかも読者のこつちまで
起こりつつある事態のキナくささに包まれてあつちとこつちのさかいがなくなる。英訳で
もこの肌感は保たれているが、論理学はその習性としてこのコトをがらす・ケースに容れ
死物化してしまう。ヴィトゲンシュタインがこのときやりたかったのは、論理の学でなく、
論理を哲学するコトだ。この風狂いの学者が論理（'A is B' is T/F）という水晶宮に籠り、
内から死に物狂いで撃ちまくって覗けた虚空より降りきたつたのが、わたしの見立てでは
〈文法〉という不思議だった。発見者はこのコトを心臓に抱えて水晶宮の外に出て来ました。

I know how it happened - I saw it begin

I opened my heart to the world and the world came in

"False Prophet" Bob Dylan

そいつがどう起つたか知つてゐる——ことの始まりを見た

「偽預言者」ボブ・ディラン

秋とはなにか。前章①を踏まえて、さきの一行目を翻せば「この世界はふるコト全てだ」夏のふゆまつりといいました。冬籠りしてものいみが完全になると“物”がふる。するとはる状態（全裸）で外に出て行く（はる）。夏の季（おわり）（極まり）もこれと同じ事態が起ちます。

みそぎする河せにくれぬ、夏の日の入相のかねのその聲により 実朝（金槐集）

天の川 みなわさかまきゆく水の一はやくも、秋の立ちにけるかな 全

氣の遠くなるほど古いコトを追つてゐるのですから最低でも万葉集の事例を訪ねるべきところですが鎌倉三代目將軍のこの源実朝という歌人（もうほとんど詩人と呼びたい）には永遠のティーネージャーたるエディ・コクランも “She's somethin' else (彼女はコトだぜ)” とついうならずにはおけないほどの二ホン語という河（文法）への沈潛力でもつて水底より玉をひろいあげてきはる。この夏の季と秋の立ちとの二首はあとで〈肉体〉の……（のうす）○でもとりあげますが、少し先回りしていえば、一首目、夏・西・暗喩軸（え・水）・聲と〈祭〉（ここ／そこ）・〈肉体〉（むすび）の四つの○をひとからげに表現していきます。母韻に注耳すると、かはせにくれぬ……かねのそのこゑにより、と（どれもか行音につづけた）えの韻律（フローリ）によつて入相のかねの聲（めいろす）を響かせて います。しかもこの入相の鐘はたんなる日没につかれる寺の鐘のことではなく西の海（河せ）は海岸でもいいでしよう）の涯に沈みゆく（夏の日輪）のイメージが鳴り響かせる永遠の聲音です。四天王寺には現在でも春分秋分の日に「日照觀」という難波難に沈みゆく夕陽を拝む信仰がのこつており、その縁起は空海によるとされて いますが、仏教伝来（聖徳太子）はるか以前の民間信仰に実情は遡るとみてええ。

ここで肝腎なのが「みそぎ」です。“河せ”は川（みそぎの元は海岸である海人族の習い）の瀬で『万葉集辞典』（折口信夫）は「川の波の立て、流る、処を瀬といふ。瀬は始終動いてゐる。浅い場処。底は小石だ。『松浦河河の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾ぬれぬ』（巻五・八五五）。せは又、時・場合と訳すべきのがある。『ちはや人宇治のわたりの速きせにあはずありとも後も我妻』（巻十一・一一四二一八）。古事記に『苦瀬にしづまむ時』』という。夏の季に土佐の海へんを旅したとき、わたしは海岸でみそぎする巫女をみた。夕風すでに寒き時に汀少し水に這入つたせに白の巫女服（裳か）しゃがみこみぢつとものいみしてゐたしか金曜であくる土曜には田里のほうで刈りまつりがある雰囲気だつた「Die Welt ist alles, was der Fall ist」大学七年生まで持ち越した必修単位のためテレワークで習初めのドイツ語でわたしは獨語したのを覚えてる「この世界はいまわたしの立ち会つて、いるコト全てだ」そういう気持を口なじみのない韻律にこめて。英語でthe caseと訳される独語のder Fallをいま初学者向けの『ベーシッククラウン独和・和独辞典』でひくと①（英case）②（英fall）とある。英語のfallにはcaseに近い意味はない。『旺文社レクシス英和辞典』訳語一覧に【動】落ちる 倒れる 下がる なる【名】落下 降る、と 転倒 秋 滝 低下 とある。der Fallのすぐ下にはその動詞形fallenがあり英語の動詞fallとほぼ同用。インターネットで語源を調べると原始ゲルマン語fallananに辿りつく。これが古英語に這入つてfeallan→fall今度caseを調べると、ラテン語casum（起こつたコト）でcadere（降る）の過去分詞と出る。古フランス語をへて古英語cas→caseへまりドイツ語ではその祖語をそのままに受け継ぎ、海洋国イギリスではゲルマンとラテン両系の「立つ瀬」、「立つ瀬」を表わす猿似語が移民して現在のfall～caseとにTPOの棲み分けがなつたというコトらしい。

滝は落ちるのでいいとして、秋fallはどうしたかというと、どつかできいたことのあるよな話だからぜひしておきたい。十四世紀までは古英語hærfestは「作物を集める」という意味だったのがしだいに時期をさす名にもうつっていった（原始ゲルマン語のharbitasから来ておりドイツでは現在も秋はHerbst）十六世紀にこれがfallへautumnに置き代わり、英国ではautumnが残り、米国ではfallが残った。autumnはラテン語のautumnusが古仮語autumpneを経由して入った。羅autumnus（秋）はauctus（増加、augēre増やすの過去分詞）にひかれかautumnusともいう。これはエトルリアの変わりゆく年の神Vertumnusと縁があるかもしないともいう（<https://www.etymonline.net/jp/word/autumn>）。前章⑪に寄せれば、fallはふる、autumnはふゆに近い。夏→秋は、冬→春の繰り返しといった。夏→秋も年越し〈祭〉で、ここに「変わりゆく年の神」がかかわってくるのも腑におちる。この神を“外在魂”“物”といつていい。インド＝ヨーロッパ語族とウラル＝アルタイ語族とはシントン^{文法}タツクスを完全に異にする。が、語の音韻世界と民俗^{〔祭〕}とに降りてゆくと、少なくも無関係とはいがたくなつてくる。幻想にものいみ試される瀬戸際だ。ひとまず我に還るといいましょうか〈文法〉に立ち会つてみたいとおもいます。なつという音韻はどこから来たか。ふゆ・はるの時とちがい、わたしの探したかぎり折口信夫も夏の語源について一言も述べていない。わたし自身、ここ一年ほど執着しましたが、これというに足る事例^{cases}は文献にも民俗にもちつともみつからない。が、言葉という物にこちらの（こうであつてくれたたら）を恣^{ほし}なすりつけるわけにもいかない。夏が「力」でなく國語^{（ある）}と考えられる以上はなづさふ奥^{（ほし）}がある。ここで國（語）学でも文献学でも言語学でもないPOETIX（保健学か）に則つて「作業仮説」を立てれば、〈肉体〉の^{〔てんてん〕}○の暗喩軸（え・水）と〈祭〉の○の夏とはアナロジカルになづ

「なづき・ふ 拘泥して早く行かぬ。（…）水中一処に滯るといふ意にも使ふ。『やくもさす出雲の子等が黒髪は吉野の川のおきになづさふ』（巻三・四三〇）」以上『万葉集辞典』は折口信夫の処女著作『口訳万葉集』の別冊として企画執筆され、両者とともに三十六年にわたる研鑽で自身乗り越えた所も多いといわれる、が、文章はそう簡単でない。以下『口訳』より「出雲の処女の黒々とした髪は、吉野川の川の真中につかつて、藻のように靡いている」原文詞書に“溺死”とある。この人磨作歌には和製おふいーりあともいうべきイマージュがある。折口の前任者・本居宣長は『玉勝間』で「万葉集に、なづさふという言、あまた所に見えたり、昔より此詞をときたる説、みなあたらず、今その歌どもを、あまねく考へ合するに、或は海川などにうかべること、或は船より渡ることなどにいひ、枕詞にも、引綱の、鳥じもの、にほどりのなどいひて、いづれもなく、水に着くことにのみいへり、水によらぬは一つもなし」『口訳』では折口もどこもこの宣長の水説を採っているが『辞典』ではあえて「水に着くことにのみ」といわず“拘泥して早く行かぬ”的意味を前に出している。まだこのなづさふからなつまでは浮かぶ瀬もなづさふ船もない。なづという語根を同じく万葉集にもあまたみられるなづむ（渋り滯る、「水・雪・草などに足腰を取られて」『岩波古語辞典』）とから想定しても「民間語源説」をちいとも出ない。（祭）に立つてふゆ・はるの場合と同じくあきとつがいで考えねば立つ瀬がなくなる。前頁へなづさひわたると、

柿本人麻呂、香具山で人の死骸を見て悲しんだ歌

426 くさまくら旅の宿りに、誰が夫か、国忘れたる。家待たまくに
旅の泊りに寝て、家を忘れている人は、誰の夫であるのか。家では、さぞ待つていて
であろうに。（人麻呂には神の心が見える。单なる同情ではない。）

ちょっと想像してみていただきたいのですがこの『口訳』は壯年控える無名の元教師が、大阪からともなつて面倒みている（ちょうど今の吉本の芸人さんみたく）元教え子の一日三人交代で底本につかつた万葉集の歌をよみあげるのを口ではしから訳していつたわが国最初の現代語訳万葉集です。想像する場面はクイズ番組（関西圏ではやらないそうです）【問題】「くさまくら旅の宿に……静寂……沈黙……」〔回答〕「旅の泊まりに寝て……」……沈黙……ここで了ることもあれば、口語の韻律に激したようになつて、あるいはそれを鎮めるよう時に時々「（まるかっこばかりのめざめのヴォイスで）人麻呂には神の心が見える。單なる同情ではない」沈黙。さすがに断言できますが『口訳』より百二十年、こんな遣り方で訳された万葉集は絶後です。人麻呂の見た神の心をみる目をもつた訳者も。ここにくさまくらの歌ですが、いやこの歌に限らずたれのコトかニホン語はいわすもがなで通します「学校文法」で習う「主語」がない。なぜないかといえど「必要ないから」なくてわかる（なにが？）からです。もうここ六年なにをするにもわたしはV T u b e rの方々の歌やニホン語でのおしゃべりをききながらしますが、ときどき注耳しておりますと（平生ニホン語話者と生身で関わりのある方はその人たち相手でも結果は同じでしようが）じつに「主語」なく豊かに話しておられる。そしてこちらもそれを了解できてしまふ。むしろ、聴き手の側で補えるというほうにケースの要がありそうだ「今、石牟礼『道子』さんからびっくりするような、招介を受けました森崎『和江』です。ここに来て、心中ニヤニヤしたりあきれたりして いますけど、どうも『暗河』『同人雑誌』の人というのか、熊本の人というのか、サギ師ではあるまいかと思つて。先ほどの会合では以心伝心で『暗河』を出しているという話でした。わたしはその以心伝心の内容が一向に伝わつて来ないのですから（…）（わたしと言葉）森崎和江）

想像してみるとここでは聴衆の「暗河」の人というのか、熊本の人“たちは脊髄反射で笑つたとおもう。話はじめてこういう憎まれ口を叩くのは二ホン語の「文法」においては“以心伝心”の挨拶と同じなのだ。が「殖民地であつた頃の朝鮮慶尚北道大邱府三笠町で生まれ」「生後十七年間、朝鮮で暮らした」「内地人「本土の二ホン人」が殖民地で生んだ」「このくに「敗戦後の母国」で、生まれながらの何かであるという自然さを主観的に持つていなかつた」（『慶州は母の呼び声』）詩人にとつて、その「文法」は“サギ師”的やりとりにしか聞こえない。内輪へ外からやつてきた者はけつして“以心伝心”的冗句などいえないと（それはユーモアとよばない）のみならず詩人というやつは（小説家とちがい）かりに單一母語圏内だとしても挨拶という挨拶が（俳人とともちがい）出来ない。このときの森崎さんはいわば四重苦でまだユーモアまでもてなかつたし、イロニーにでる余裕もない絶体絶命だった。思つたことをいきなり口にするコトなど今までさえ二ホン語の「文法」にはない。“熊本の人”になつて続きを聞く「いつたい、これは何なんだろうと思つてみつめていたんですね。みつめていても一向に分らないんで、やつぱり他所ものだと、さみしくてたまんないんですね」ところが、にこやかに石牟礼さんは、わたしを紹介して下さつて……。

なかまのように、さらさらと」みなまで言つてもらわないと分からぬ、対話にならない、さみしい……と彼女はいう。もしかすると聴衆の多くはこのとき生まれてはじめて他者を目の前にしたかもしねない。しかもこの他者は、じぶんたちとたぶん同じ血の流れを多く汲みかつ似たような言語を話している。そしてこう思つたかもしれない“いつたい、これは何なんだろう”やつぱり他所もの“かなあ。このシーンにいわあせているのは“熊本人”と森崎さんとわたしたちだけではありません。二ホン語もいつしょにくるしんでいる。

森崎さんの分からないは、極言していえば和歌が分からないよといつてている。その〈文法〉が分からぬといつてているのだ。アメリカ留学帰りの母の宰領する個人主義家庭で育ったなどといつてもきたわたしだが、はてさてついこのあいだにも池袋駅で降りまた乗るとき、ICの出場記録がついていなかつたので窓口の駅員さんに「きょうのお昼ごろ品川駅から来て出たんですけど出場記録がついてなかつたみたいで……」即座に了解されて「入れるようになります」改札をとおり（まーたやつてるよ……）とおもう。ついうめきができる。いまはむかしニホン語に「片歌」という形式ありますて、一人で五七七。それにもう一人が五七七かつ同じシンタックスでもつてかけあう（主に男女で）これを一人でやるようになると「旋頭歌」となり（これは万葉集にみえる）さらに五七七・五七七の二番目の七が融解し（別に長歌の結びの五七七の影響もありつつ）五七・五七七の短歌形式が成立する。それでわたしの「……」を汲んで駅員さんは出場記録をかいて「入れるようになります」と“以心伝心”かけあつてくれたというわけだ。わたしの母方の祖母（山形出身）はこれを嫌つており「いまの子はみんなこうだから意味不明でわたしや困るのよ」が、事実はいまどころか上古以前からそうだつた。わたしも和歌が分からぬ口と思つてきたが、サギ師の手口だつた。草枕 羈宿に、誰嬬か、國忘れたる。家待まくに（草枕羈宿尔誰嬬可國忘有家待真國）

「『待たむ』から『待たまくにあり』という語法ができ、プレディケートを省略する。それが『待たまくに』だ。待つだらうことである、という意味」（『折口信夫全集ノート篇』第十卷）（省略）といふので「待つだらうこと（なの）に（忘れてある）」という反語による詠嘆でなくむむ（助動詞）+aku（後述）でニホン語では二重母韻がづづむのでuが溶けmu+aku→maku

いまの二ホンの義務教育の「こくご」カリキュラムでは小学校二年で「主語」「じゅつ語」を習う。これは明治以降、英文法を鑄型として現東京大学の国語学閥を中心に铸造された「学校文法」に則っている。英文法の基本はSVだ。体言（名）詞、句、節、「代名」全に動詞（用言は活用に着目しておりいまは関係ない。be動詞+形容詞にしてもまず第一に動詞がなければ話にならないという観点でここは動詞とする）がくつつくのが文の基本だ。この基本にかかるメインの体言subjectを「主語」、動詞verbを「じゅつ語」と翻訳している。さきのプレディケートはこの「じゅつ語」にあたる。折口があえてこう言うのは、これはこうだ（である）と言い切るニュアンスを込めたかったのだとおもう、そしてニホン語にはそれを省略する傾向がある。ただ言わずに了う、いい方をかえれば、言わずに了えるのであって、省略といふと基本形からさしひく意味で、そうでなくして、ニホン語において基本形はあらわでないから省略といわぬいほうがよく、表現のエコロジーでそうするのもなく、わたしたちのPOETIXでいうところの「心」の○でかむかふべき、宿命にも似た無意識の傾きがある。だから省略にかわる言い方は、現時点ではまだ提案する用意がない。またそれがいいかわるいかは、いいところもあればわるいところもなきにしもあらず、といふほかない。ただその事例^{こと}のあるコト。おや……とすると、ニホン語においていわゆる「主語」は文脈上必要なときしか姿をあわらさないし「じゅつ語」は言われずに了うコトがあり、英文法において（仏文法でも……SVを基本とする言語は世界中に八つしかない。スウェーデン語デンマーク語ノルウェー語オランダ語^{（金谷武津著述語制言語の日本語と日本文化調査）}ドイツ語英語、ラテン語派生のロマンス諸語中ではフランス語と消滅寸前というスイスのロマンシユ語のみ）その基本とされるSVを（それぞれ意味合いは別でも）なくて了える（表現の完全を果たせる）

同じ球技でも野球とサッカーくらい違う「言語ゲーム」を同じ基本ルールで語るのと同じことがガキあいてに行われていることになる。当然、教える側含め、だれもが文法はサギとは気づいてる。気がつきながらも足が洗えずにはいる。サギを「サギだ（である）！」というプレディケートを先送りにして濁している。のみならず学校で教わる英文法さえも役に立たないとだれもが思つてることならちよつと前の「P P A P」の大ヒットが教えてくれた。ペンパイナツポーアツボーペン！は体言が体言だけで連弾して文をなせる（文法）と音韻のここちよい列びが「文法」の試験を通らずに（（文法）の関は通過して）ビートに乗つて歌意のような somethin' ^{コト}を表現した二ホン語が英語に思い出させた美といつてよく、ただ役立たずの「英語」の教科書（情報商材）の例文を揶揄あらわすしただけの笑いではなかつた。「学校文法」という王の裸つぱりを笑うのはいい。なら文法（一般）まで蹴飛ばしてよいか。文法はなんのためにあるのでしょうか。いつどこで必要となる？それは、自分を知るため。他者と出会うとき。この二つだと思います。自分を知ろうとしない者に他者が訪れる事はありません。なかまのようにななにかならできるかもしね。けどそれはさみしい……

愛する人

とおい原始の野に立ち黙している人よ。

山間の祭りに火が燃えて

どよめきが林をうつる

ひそかに瓦の呪詛をぬけて今宵はだしで待つています。「朱と緑の肖像」最終聯 森崎和江
ここには他者にひらかれたプレディケートがあります。きちんとといきつて返事を待つ。初期の詩です。森崎さんはさいごに本懐を遂げられるタイプの詩人にいらつしやいました。

「叙述語を切り捨て、了ふ理由は訣らない。ともかく、入り用な、大事な部分を切り捨て、しまふのである。此傾向が、どこから出て来るかと言ふ事を考へる事が大事だ」（「国語学」）戦後晩年ちかくに折口信夫が通信教材として口述筆記したこのテキストはわたしには一葉の置き手紙にもおもえる。そこで最後にとりあげているのがこの省略というコトであった。とくに平安期に入るとその成果たる源氏物語でも、あさまし・をかし・かなし・あはれの「あさましく……なり」「をかしく……なり」「かなしく……なり」「あはれに……なり」とつづくべき叙述部分が失われて、副詞的に感情の程度を示すにすぎない片割れ詞が叙述語として扱われるようになる。この省略の傾向は令和現代にもあさましく健在であつて例の「えぐ（い）」「やば（い）」「メロ（い）」「エモ（い）」なのだが、じつさいクラッシックな国語表現とともにいえる「えぐく……だ」「やばく……だ」「メロく……だ」「エモく……だ」の表現すべきフレディケートを軒並み“以心伝心”まかせにする。この習性が“どこから出て来るかと言ふ”とそういう生理がア・プリオリにわたしたちの心に種としてあつたのでなく「かうした語遣ひが、我々の気分の上に、さう言ふ習慣を作つて来たのだ」（同前）。またこの習慣が「かうよろづのつ、ましさを忘れぬべかめるをしも」「かようしさまざまの遠慮を忘れてしまいそうであるようなのをそれこそ」（『東屋』）（『日本文法体系』藤井貞和より）というような助動辞^(同)の発展・フレディケートなき動詞ニュアンスの子細化をうながすことにもなつたといふ（現代のわたしたちにとつてそれより前の万葉集より断然と源氏物語の原文のほうが敷居が高く感じられるのはこのためだ）“習慣を作つてきた”といふからには源氏物語の突然発生でなく万葉古今後撰と進んだ詠歌の副詞撰択の意匠化が事態を設いた。^{The case} 見方によれば世界文学基準といえる高度な長篇ロマンをなした誇るべき文化資本ではある。

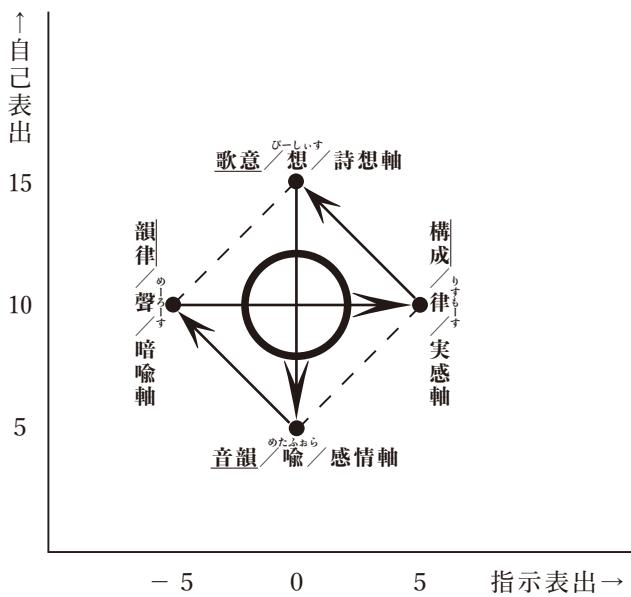
が、これは「或点から言へば、大きな弱点にもなる」「たとひ文学的には優秀性を明らかに持つてをつても、言語には尚、科学性の深い論理が重要なのである。おそらく、日本語の今後の行くべき所は、助動詞の発生原因が示してゐる様に、気分を豊富にし、感動を豊かにこめ、判断をきつぱり言はないと言ふ様な点から、脱却する必要が多いのだらう。それは助動詞の表現に対しの、「反省と言ふことが必要だと思ふ」（国語学）無実のまま古徽の生えたようなサルトルの「実存は本質に先立つ」という言葉をここでとりあげてもいい。惰性からそくなつていてるにすぎない因襲を「伝統」と名づけこれになづんでみたり誇つてみたりしてみてもそれは内部の荒廃しかよばない。来客を拒否するうちは腐臭にうづもれでゆく。もいちど屍を生きづかせ外に咲かせる命が⑪にいう折口の“物”“外在魂”だつた。プレディケートを省略する不安から源氏物語の「もののあはれ」（本居宣長）を開け放つた花咲爺じいがいます。世界文学として通用する二ホン語の宝・源氏物語と肩を並べる、いや凌駕しているのは「いひおほせて何かある（いいきつたところで何がのこる？）」（芭蕉）精神もつH A I K Uだらう。いわばこれは、心閉ざす省略の本質を心臓開く沈黙の実存にふゆごもりまたしふるコトはるまつり（もののあはれ）だ。伝統を守つとは、このコトを何度も何度も全たしつづけるコトでしかありえない。でなければそれは空虚になづむ。「みそぎ」とはしんじつこのコトであった“拘泥して早く行かぬ”——たれが？——魂たまが

「中昔のころには、盆という時期は、死人の魂が戻つて来るとともに、無縁の亡靈もやつて来ると考えた。そのため、家では魂祭りをし、外では無縁の怨靈おんりようを追い払わねばならぬ。この考えが変化して、盆のごとく、聖靈も中一日いるのみで、追い返されてしまう。少しでも、亡靈を嫌がるそぶりを見せると、また戻つて来ると考えた。戻られると厄介だから、名残り惜しい名残り惜しいという意味を口に唱えるが、実は嘘で、そう言いつつ追い払うのである」（『古代研究』）

「あく 本集には、独立に用ゐられた場合はないやうである。唯、水に關した序歌があつて、飽くとつゝけた例が可なりある。単に飽満するだけならば、水の縁の序歌は使はぬはずである。『難波潟汐干のなごりあくまでに』（卷四・五三三）、『秋草におく白露のあかずのみ』（卷二十一・四三一二）、『玉しける清き渚を汐満てばあかずわれ行く』（卷十五・三七〇六）。古今集には、あかにかゝつたのがあるので、『掬ふ手のしづくに濁る山の井のあかでも』（四〇四、貫之）、『岩間行く水の白浪立ちかへりかくこそは見めあかずもあるかな』（六八二）（…）古代の地名にも、飽浦（紀伊）・飽田（肥後・筑前）・齶田（アキタ）・飽海（アカシ）・飽多（アカタ）などの外に

も、安芸・阿岐・安岐・阿久津・阿久沢など到る処に見える。羽後の秋田を開田アキタだとし、常陸の飽田を飽き喫うた地だからと説いた地名説明は信じにくい。ともかく古代にあくといふ水の動作を表す語があつたことを信じてゐる。方言の比較から、この語の本義が見出されさうに思ふが、其れ迄の仮説としてあくはわくと同系の語で、意義は多少分化して、水の涸れた処へ、又、泡が噴いて、水の湧き出る容子かと思うてゐるが、或はあすと同じ語で、語尾のくとすとの転換かといふ考へも持つてゐる」

「於土左室生門崎寂暫。心觀明星入口。虛空藏光明照來、顯菩薩之威、現佛法之無二」拙訓
「土左は室生門崎に於て暫く寂す。心を觀じ明星口に入る。虛空藏の光明照り来て、菩薩の威を顯はし、佛法の二無きを現す」普通入る、来たりて、現はす（現す）となぞ訓むのを、漢字の訓み方は原理的に自由なのによつた。さらにこの序説に引き寄せて意訳してみれば「高知県の室戸岬でしばらくもに籠つていた。ものいみ全しき瀬に明けの明星（金星）が口に來入つた〔ふる〕。奥処のあかりがこうこうとやつて来て、菩薩のパワーが見えるようになり、仏のこの世に二と無きコトでからだじゆういつぱいになつた〔あく〕〔→以下はる〕」（文体からして「御遺告」は空海入定後の偽書という見方も強い（Cf. <https://www.mikkyo21f.gr.jp/kukai-ronyu/nagasaki/post-329.html>）『三教指帰』「勤念土州室戸崎。谷不惜響、明星來影」拙訓「念ひを土州は室戸崎に勤ます。谷の響くを惜します、明星は影を來たす」こつちが真筆）



私事ですが、わたしはここ五年ほど品川区の京急線沿線の立会川というところに住んでおりまして、すぐ近くに二つの運河があります。明治までは品川湾の遠浅海岸で「鈴ヶ森」というのが地名に遺っていて江戸時代にはここに大罪人を火炙り・串刺していた磔刑場があり、かの八百屋お七もここで弱火でじっくり潮風にさらされながら灼かれた。そこに渡る罪人の身内が最後に別れに立ち会い見送る川でしたので立会川といい現在は川と駅との付近の名として残っているといいます。夏といわず冬でもわたしのよくこの川（異様に汚く臭い）や運河に這入ることは性でありまた癖なようで、中高と、春のおかしな文化祭、秋にはちと変な運動会の奇しい活動に従事していたせから多摩川を基礎とし渋谷川や湘南や熱海や下田やと、とにかく川や海に這入りまくつていきました。最近母から聞いた話では、三つ子の頃から、池水があればところ構わず這入ったときますから宿阿です。そして流れや濁のなかでしばらくぢつとしている。土佐でみそぎする巫女さんをみたときはもう自分がそこに見た気がいたしました。そして少しくやしくもあつた。日のくれなずみのなかひどく様になつていてからです。前章⑪でふゆとはるとどこまでも折口信夫に依拠しましたが、なつとあきについてはこの耳よき人にも判然としなかつたらしく、詩人＝学者としてわからないことはわからないままに「おきになづさふ暗示をのみ遺していかれました。